



東野圭吾と猫

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006038

東野圭吾と猫

堀 江 珠 喜

1994年4月に東野圭吾は自宅近くで「大きさはクロワッサンほど」の「赤ちゃん猫」を拾い、夢吉と名付けて飼い始める。その辺りの事情については『たぶん最後の御挨拶』(2007)に詳しい。その前夜に猫を拾う夢を見たのが現実となり、「吉」を運んで来て欲しいとの思いを込めて命名した。(ただし96年のエッセイ「ふん」によれば、その猫を東野の好きなマンガ『クマのプー太郎』に因んで「夢プー」と呼び、そのうち「夢プン」から「プン」になったということだが、本論では夢吉の名を採用する。)この猫のおかげで「練馬の仕事場から帰るのが楽しくなった」とある。

ずいぶん活発な猫で、圭吾がかわいがっている様子は、『たぶん最後の御挨拶』の表紙全面にその茶色い毛並みの写真が用いられ、目次や各章のタイトルページに東野自身による猫のイラストが配置されていることから伺える。つまり作家人生における、とりあえずの集大成的記録集というべき単行本で、しかもタイトルから伺えるように「最後」のエッセイ集と決意し、今後は本業の小説により力を注ぐ旨を「あとがき」で宣言した書物を、飼い猫への愛情で包んだのだ。では東野の作品において、猫はどのように扱われているのか。

確かに猫好きの芸術家は多い。彼らが描いた猫については20年前に拙著『猫の比較文学』で議論したし、その後も小論や講演で芸術における猫の描かれ方について機会あるごとに発表してきた。もしかしたら東野文学を考える上でも、猫はひとつのキーワードになるのではあるまいか。そしてそれはミステリー作品ならではの使われ方をしてはいまいか。そもそも探偵小説の元祖とみなされるエドガー・アラン・ポーの代表作は『黒猫』である。そこで拙論では、東野圭吾の描く猫に注目し、その意義について考察したい。

《登場しない猫——夢吉以前》

まず東野が、果たして父親の平岡梓に「猫気違い」と呼ばれた三島由紀夫ほどに、元来の猫好きであったかは、はなはだ疑問である。嫌いではなかったにしろ、彼が夢吉を拾う以前の作品やエッセイには、ほとんど猫が現れないのだ。

たとえば『鳥人計画』(1989)では、極秘資料を盗み出した相手に、こんな言葉が投げかけられる——「先日実験室に猫が一匹入りこんだ形跡があったが、こんなものをカツオブシと間違えてもっていったらしい」。確かに「泥棒猫」という表現はあるが、この作品の場合、明らかに盗んだのは人間だ。猫好きの読者の脳裏には、猫が資料を啜る様子が浮かぶかもしれないが、それで終わったのではこの一文の皮肉が理解できていないことになる。盗人を「ネズミ」や「頭の黒いネズミ」などとは呼ばず、猫のイメージを用いたことから、東野の潜在的な猫好きと同時に、彼のユーモアのセンスもうかがえよう。しかしいずれにせよ、ここでは本物の猫

は登場しない。

さらに『宿命』(1990)では、実業家・瓜生直明が若い後妻とのあいだにできた園子を溺愛したが、それは「老人が子猫をかわいがるようだった」とある。なるほど、彼女は「子猫」以上の存在ではなかったのかもしれない。直明の遺言書には、長男の晃彦にほとんどの財産を譲る旨が記されていたが、園子についてはまったく触れられていなかったのだ。ちなみに、この園子は「猫に似た目」をしており、母の不倫が父親にストレスを与え、死を早めたと考えている。

この作品で「猫」という言葉が使われるのは犯人が逮捕される場面である。近所の家に電話をかけて飼い猫の始末を頼むのだ——「貰っていただけたところがあれば一番いいのですが、それがかなわぬ時には、保健所に連絡して下さい。……はい、ご迷惑になってもしけませんから。……はい、どうかよろしく願いいたします」。この犯人の社会的責任感の強さが示されるのだ。(実のところ、殺害の動機もこの社会的責任感が強すぎることにあったのである。) 愛猫の殺処分は飼い主にとって耐え難い苦痛であろうが、近所への迷惑や、その猫が野良となって野垂れ死ぬかもしれない過酷な運命を思えば、保健所に渡すのがベターと判断したのだ。

とはいえ、このような電話でのやり取りだけで、ここでも実際の猫は登場しない。まだ猫を飼っていない東野には猫を描くことにためらいがあったのかもしれない。しかし犯人のペットが犬ではなく猫であるという設定から、はからずも東野の猫好きな資質がうかがえる。

さて『むかし僕が死んだ家』(1994)は5月に単行本として刊行されており、4月に拾った夢吉の影響をここに見るのは無理があろう。だが少なくとも、東野がこれまでも増して猫に興味を持ち出したと思われるのだ。もしかしたら、猫が欲しいとの思いゆえに猫を拾う夢を見たのではあるまいか。

ただし、ここでも本物の猫は登場しない。あくまで言葉の上だけの「猫」で、しかもそれは小学6年生児童の日記に基づくあくまで読み手による想像上の猫である。主人公は、古い日記から過去の事実を探ろうとするのだが、そこにこんな一節があった——「学校から帰ったら、あいつはソファでねそべっていた。あいつに見つからないうちに、すぐに自分の部屋へ入った。するとベッドにチャーミーがいて、この間のようにみゃあみゃあとなっていた。またあいつにひどいことをされたのだ」。

子供の言葉遣いはときに常識破りの感覚によるものだが、成長すればどうしても限られた判断力でこれを理解しようとする。そこで誰でも「みゃあみゃあ」とあればチャーミーを猫と思うだろう。それがこの物語の、読者に仕掛けられたトリックだったのは、猫好き資質の、しかも東野ならではの発想だ。しかも猫は子供部屋のベッドの上にも違和感を抱かせない動物なのだ。その様子を想像するのは容易い。ましてや、この擬声語で猫以外の存在を連想されるには無理がありすぎる。だが、これを書いたのは子供、という言い逃れが用意されている。まさに巧妙な手口である。

この類のミスリードはまだ続く。「丸めた紙でチャーミーとキャッチボールをして遊んだ。チャーミーは最初はへただったけれど、うまくキャッチできるようになった」との日記文につ

いて「猫がキャッチボールなんてするのか」——「するわよ。両手で挟むようにキャッチするの。友達の猫がしているのを見たわ」とのやりとりがある。もうこれでチャーミーが猫という見方に疑問を抱く読者はいまい。それどころか猫好きなら、器用に前足を合わせてキャッチする姿を想像して嬉しくなるはずなのだ。東野自身も、そんな猫の様子を実は思い描きはしなかったか。いや、こんなエピソードを挿入するのは、猫好き資質の遊び心によるものと思われるてならないのだ。

しかしそれでも猫は存在しなかった。だが存在しない猫が、主人公とともに読者をミスリードし、物語の展開に寄与するという極めて重要な役目を果たしているのだ。これこそまさに東野ならではの逆説的な「ミステリー」の猫であろう。

《夢吉登場》

前述のようについに東野は赤ちゃん猫を拾い、育てることにした。この猫が作品に登場したと思われるのが、加賀刑事シリーズの『どちらかが彼女を殺した』（1996）においてである。ただし現実の猫でない。だが、それ以上の意味を持たせているのだ。

まず物語の発端は独身OL・和泉園子が、昼食時に蕎麦屋へ行く途中、道端で売られている油絵のなかに猫の赤ちゃんを描いたものを見つけたことである。「茶色の子猫が、片足を上げて自分の股の間を舐めている」絵で、「ひっくり返らないように、片方の前肢で身体を支えている姿がなんともいえず愛らしい」のだ。これは夢吉の赤ちゃんの頃の動作を東野が思い描いたものではあるまいか。このとき園子は買いそびれたが、退社後にそこへ戻り、値段を尋ねると、その絵の作者で売り手の青年はくれるという。これが彼女と佃潤一との出会いのきっかけとなった。だがもし彼女が猫好きでなかったり、猫の絵がなかったりしたら、この二人が親しくしゃべることもなかったのだ。

この小説において「猫」を「犬」に置き換えた場合、同じ結果が得られるとは思えない。なぜなら猫好きは、どんな猫にでも反応するが、犬好きはそうではない。そんな猫好きの心理がわかっている東野は、エッセイ「僕がろくろを回すわけ」（1998）で陶芸品を作り、展覧会で売れるように「困った時のネコ頼み」で大皿からぐい飲みまで全作品に猫のさまざまなポーズを描いたのである。東野の作戦はこうである——「いうまでもなく、ターゲットはネコ好き人間である。彼等が、ネコ関連グッズなら何でも欲しがるということを、同類人間の僕は十二分に知っているのだ」。つまり夢吉の子猫時代を描いたような油絵なら、園子も魅せられて即座に購入する可能性が高いということである。

さて、園子はお礼に潤一を食事に誘い、数日後、潤一は蕎麦屋で昼食をとる園子の前に現れた。彼女が来そうな場所で待っていたのだ。前回の絵が得心のゆかない出来だったので、同じテーマで書き直したものを持参して彼女に渡すのが目的だった。猫好きの園子は両方の絵を自分の部屋に飾ることにし、二人は付き合うことになった。猫の絵が二人を結びつけたが、それはまた園子が殺される序章でもあった。

だが、この物語において「猫」は園子の死が自殺か他殺かを捜査する際の、重要な証言を得

るきっかけをも作ってくれた。一人暮らしの園子は隣人の女性ジャーナリストと、猫好き同士ということで話が合い、園子の部屋にはくだんの猫の絵が2枚飾られていたことや、園子がそれらの写真を大事そうに持ち歩いていたことなどを警察に話したのだ。また園子やその部屋の音にも無関心ではいられなかったようである。だが彼女が死んだ部屋からは、それらは見つからなかった。捜査においては物証が消えたという事実も重要である。

さらに園子の部屋にあった子猫のカレンダーは、週単位の日付を示すものであったが、園子の亡くなった翌週をしめしていた。つまり誰かが一枚、ちぎったことになる。これもまた彼女の死が自殺によるものではないとの推理に役立った。またしても子猫である。すなわち、「子猫」が園子と潤一を引き合わせた故に、悲劇が起こったが、それを解決に導いたのもまた「子猫」であったと纏めることさえできる話なのだ。それほどまでに「子猫」にこだわるこの頃の東野から、間接的にしろ、夢吉に対する愛情を汲み取れよう。

ちなみにこの年の『小説現代』12月号に掲載されたエッセイ「ぷん」では、夢吉について「ほんとにもう、がっかりするほど使えない猫なのだ」と述べ、その凶暴なほど元気な様子が綴られているが、その苦り切った言葉からですら、実は東野がこの猫に夢中なのだと言った猫好き読者なら理解するだろう。それほどまでに、夢吉は東野の生活と文学に入り込んでいたのである。

《猫殺し》

猫殺しが人殺しのいわば序章になり得ることは、現実の事件が証明し、また三島由紀夫が『午後の曳航』（1963）で描いてもいる。東野がこのモチーフを使うのは、やはり加賀刑事シリーズの『悪意』においてである。それにしてもミステリー小説であれば殺人が行われることに驚きはないが、猫好き作家がたとえ作品中といえども猫殺しを取り入れるアイディアに対し、理解に苦しむ猫好き読者は多いただろう。前述のように三島由紀夫もかなりの猫好きだったのである。

さて『悪意』においても、猫殺し犯が、方法が異なるとはいえ人を殺す。だが犯人の猫殺しの目的は、殺害の練習のためなどではなかった。加賀刑事が「一見何でもなさそうなところに、深い意味のある仕掛けが隠されていた」というように、社会的成功者である被害者に猫殺しの汚名を着せることで、イメージダウンを図り、それ以降の悪い印象が受け入れられやすい土壌をまず作ったのだ。つまりここでも、「猫」はミスリードのための重要なファクターとして使われたのである。もちろんミステリー小説の「お約束」通り、犯人は逮捕される。ここでは、ちゃんと東野は猫の復讐を果たしたのである。

東野が書いた次なる猫殺しは、『悪意』の翌年から発表された『私が彼を殺した』（1997-8）においてである。この作品では、要所要所に「猫」が配置されている。まず、神林貴弘と妹の美和子は、幼い時に両親を事故で亡くしたため、貴弘が大学に入るまで別々の親戚に預けられていた。同居後、彼らは「猫のようにじゃれあった」し、ついには兄妹として越えるべきでない一線も越えてしまう。だが、そんな美和子が結婚することになり、彼女がその家で寝るのも最後の夜になった。このとき、彼女は貴弘とハワイ旅行したときに買った猫がゴルフをしてい

るイラスト入りTシャツを着ている。彼らは猫を飼ってはいないが、猫好きが猫グッズを買うという傾向から、猫が好きであろうと推測できよう。もちろん本当に猫好きなのは東野で、だからこそ、ここでたいして必要と思えぬ「猫」を出したのだが、もし意味があるとすれば登場人物が猫好きであるとの印象を残しておきたかったからと思われる。

いっぽう、美和子の婚約者・穂高誠のマネージャーを務める駿河直之が、浪岡準子と知り合ったのは、自宅マンションのエレベーターで、彼がペットのロシアンブルー、サリーをケージに入れて提げていたときである。風邪をひいているのに気付いた準子が、自分の勤務する動物病院を紹介したのだ。美人の準子に魅せられて、以後、彼は「猫をダシに何度か病院通いをし」、準子をお茶に誘うようになる。だが彼女に頼まれ穂高に引き合わせたため、直之は失恋する。準子が穂高と付き合い始めたのだ。

つまり、「猫」が直之と準子を出合わせ、それにより準子が穂高と交際し、そのあげく穂高と美和子の婚約によって捨てられることになる。これが、この物語における殺人事件の発端である。

美和子と穂高の結婚を望まないのは、貴弘も同様である。挙式前日にホテルで宿泊するも、眠れぬ一夜を過ごしそうなので、彼は本屋とコンビニへ出かけ、マイクル・クライトンの上下本と、アーリー・タイムズの小ボトルやおつまみを買う。ホテルへの帰り道、白と黒の斑模様の痩せた猫がいた。しかも左側の目がヤニだらけで、つまり、ちっとも可愛くないのだが、猫好きならば無関心ではいられまい。貴弘は、コンビニ袋からチーズかまぼこを取り出してやった。猫は少しだけ警戒したが、すぐに食べ始めた。「この猫と、今の自分と、どちらがより孤独だろうと僕は思った」とある。

翌日、挙式直前に穂高が毒殺され、彼に失恋した準子は悲観してその前夜に服毒自殺していた。このどちらにも同じ薬品が使われたことから、おのずと容疑者は限られた。

容疑者の一人、準子を愛していた駿河直之は、自宅に帰り、彼女との出会いのきっかけとなったサリーを抱き上げた。猫について準子がくれたアドバイスの言葉を思い出し、彼女の横顔が脳裏に蘇ると、「ガラスに映った猫の顔に浪岡準子の顔を重ね合わせ、心の中で呟いた。/準子、仇をとってやったぞ。/俺が穂高誠を殺してやったぞ——。」

物語の中盤で、このように心の中とはいえども、殺人を告白していいものだろうか。おそらく読者は、彼がなんらかの形で殺人に関係したとしても、直接的に手を下すのは無理な状況も分かっているはずだ。だが後日、直之を訪れた加賀刑事は、帰り際にサリーを見て、「この猫は幸せそうだ」と謎の言葉を残す。何者かと比べて「幸せそう」という意味になるのだが、いったい誰と比べたのか。もちろん準子に死なれた直之や婚約者に死なれた美和子、穂高に裏切られて自殺した準子など、不幸せな人間だらけである。しかし、このとき、加賀刑事はもう一匹の猫と比べたことが後に説明される。この物語におけるもう一匹の猫とは、貴弘がコンビニ帰りに出会った薄汚い哀れな野良猫だけである。その猫は、実は、貴弘によって毒殺されたのである。

その日、貴弘は、穂高の家に忍び込んだ準子が、ピルケースに2錠のカプセルを仕込むのを

見た。そうとは知らない穂高が、古い薬はよくない旨の美和子の言葉に従って、これらをゴミ箱に捨てたので、貴弘がそっと拾い、この効果を試すべく、野良猫に餌として与えたのだ。彼にも穂高への殺意はあった。従って、これは人殺しの前の猫殺しのパターンを読者に想起させるエピソードだ。

しかし本来、猫好きのはずの貴弘には、哀れな猫が自分に重なりはしなかったか。大切な妹が穂高などというつまらない男と結婚し、自分の元を去ることを考えると、貴弘は絶望的になり、生きる力も失いかけていたのではないか。つまり、ここでの猫殺しは、象徴的には「自分殺し」ともとれるのではあるまいか。猫好き人間が猫を殺すのは、『悪意』での猫殺しとは意味が違う。だが猫好きの東野が、加賀刑事シリーズにおいて、続けて猫殺しを扱ったのは興味深い。

《夢吉より上等な猫》

『私が彼を殺した』に登場するサリーはロシアンブルーで、東野の愛猫・夢吉とはタイプの異なる、ありていにいえば市場価格の高い洋猫だ。1997-9にかけて東野作品に登場する猫には、夢吉らしき面影はない。

ガリレオ・シリーズの短編ミステリー「壊死る（くさる）」(1997)では、ホステスの自宅で聞き込みをしていた草薙と湯川の前に、飼い猫でやはりロシアンブルーのネオンが現れる。首輪にブローチのようなものをつけている。これが事件解決の糸口になる。猫が登場したのは、若いホステスが室内で飼うのに適しているということなのだろうが、ペットが許されるマンションであれば、小型犬でもいいはずだ。しかし、重要なヒントをもたらしてくれるのは、東野にとっては犬ではなく猫、ということではあるまいか。

次に、「壊死る」と同年同月に発表された加賀刑事シリーズの短編ミステリー「第二の希望」(1997)では、冒頭部で白いチンチラペルシャのトムを抱いた老婦人が登場する。約1週間だけ預かっているのだ。この期間が限定され、抱きたくなるほど可愛い猫で、しかも毛足の長いことが、後に新犯人をつきとめる手がかりとなる。加賀刑事が死体についたこの猫の毛を見逃さなかったのだ。

意図的ではないにせよ、犯人を教える結果となるのは、エドガー・アラン・ポーの『黒猫』においても同様だが、「第二の希望」の猫は白く「あまりの美しさとかわいらしさに声を上げ、交代で抱かせてもら」いたくなるほどでなければならなかった。さらには、見知らぬ者にもおとなしく抱かれる性格の猫である必要があったのだ。どうやら夢吉とは真逆の性格のようだ。

だが、おそらくは大部分の読者は、老婦人が白猫を抱いている姿を、ひとつの風景としてしか捉えなかつたのではあるまいか。猫好きでなければ、記憶に残らなかつたかもしれない。しかし東野は、この猫を、ミステリー小説ならではの仕掛けに用いたのだ。

同じく加賀刑事シリーズのミステリー「友の助言」(1999)では、萩原が、飼い猫でアメリカン・ショートヘアーのビッキーに餌をやり終えたときに、妻からの電話がかかる場面から始まる。その日、彼は浜松町で広告代理店部長と会い、加賀とは渋谷で会うはずだった。だが、妻が猫の餌の用意をせず里帰りした旨の連絡があり、彼は横浜の自宅にいったん戻ったのだ。

ここで「猫」は、萩原をどうしても家に帰らせるための口実として仕掛けられた。犬でも室内飼いならよかっただろう。ただあの場合、コードレスホンだが固定電話に出られる状況でなくてはならなかっただけだ。もちろん愛猫に餌をやるためわざわざ帰宅する男の姿に、東野が自分自身を重ねたかもしれないが。

実は「猫の餌やり」口実トリックは、「友の助言」の5カ月前に発表されたガリレオ・シリーズ短編「霊視る（みえる）」（1999）でも用いられている。犯人は脅迫者を殺す際のアリバイ工作として、白いベルシャ猫を利用する。この猫は近所の本屋の夫婦が飼っていたもので、彼らがカナダ旅行中の10日間、犯人は積極的に預かることを申し出たのだ。こうして入手した猫のために、自分が出張中に餌をやる係として友人を雇う。なぜならこの友に目撃証言をさせる必要があったのだ。

猫に餌を与えるというごく当たり前の行為に、巧みな犯人の知恵が加えられ、これらのミステリーには不可欠な場面が出来上がった。猫でなくても小型犬なら辻褃が合ったかもしれない。だが、猫好きの東野なら、ここは猫、でなければならなかったはずだ。いずれにしろ、これらの作品では、猫の餌やりという口実で、他者を動かし、犯罪に巻き込むというミステリーならでの、そして東野ならでの「猫」の使い方に注目したい。

《猫の写真》

ところで「霊視る」の被害者・長井清美は写真撮影を趣味とするホステスである。ただし市井のアマチュアカメラマンのように本格的なカメラやレンズを携えて美しい景色や花などの撮影を楽しむのではない。「いつシャッターチャンスがあるかわからない」と、日常的にハンドバッグに小型カメラを入れ、気になったものを撮りまくる。今でこそ、小型デジタルカメラやスマホが普及し、多くの者がいつでも撮影できる状況だが、この作品が書かれたのはフィルムカメラ使用の時代である。とすれば、清美の趣味は特異な部類に入っただろう。

たとえば、彼女は夜、レストランを出てタクシーを捕まえる前に、電柱のほうにカメラを向け、野良らしい斑模様の子猫の写真を3枚くらい撮った。この撮影のエピソードには、彼女の変った趣味を裏付ける意味がある。特に彼女が猫好きだとは記されていない。好きでなくても嫌いであれば子猫を可愛いと思い、撮影するかもしれない。いずれにせよ、ここに「猫」を登場させたのは、猫好きの東野のこだわりによるものと考えられよう。

というのもこの短編と同年に出版された長編『白夜行』でも、カメラ好きの雄一の叔父が、かつて地元の町の風景を撮影した写真の中に、猫の写っているものがあった。「どこかで見たことがある細い通りを、二人の男女が歩いている。電柱のポスターは剥がれそうになって風に揺れ、手前のポリバケツの上には猫がうずくまっていた」とある。おそらく手前の猫を写したかったのではないかと思われるが、凶らずも、雄一の悪友、菊池のようにこの男女の事情を疑う者には極めて興味ある場面が写っていたのだ。そこで菊池は、脅迫とまではいわずとも、ある種の嫌がらせに使おうとした。

写真はミステリー小説において、しばしば脅迫の材料として用いられる。猫の写真自体には

なんの脅迫価値もないが、それでもなんらかの形で「猫」を絡ませていることが東野らしく、興味深いのである。

《猫のような女》

かかる『白夜行』は直木賞を逃した作品ではあるが、東野文学の最高峰と見做す愛読者は少なくない。そのヒロイン・唐沢雪穂はときおり「猫」として表現される。まず小学5年生の彼女が自宅アパートの鍵を借りて不動産屋を訪ねたときである。「大きくて、どこか高級な猫を連想させる目が印象的だった」とある。また中学時代の雪穂についても前述の雄一が彼女をそっと撮影しようとした場面で、「上品な猫を連想させる彼女の目は、隣の友人に向けられていた」とも記されている。

「猫に似た目」の女性については、前述の『宿命』の園子への描写に見られたが、このときは彼女がヒロインあるいは物語に不可欠な重要人物でもなかった。また園子には猫タイプの女性として描かれがちな妖艶さや神秘性、ずる賢さが備わっていたわけでもない。つまり園子が猫のような女性である必要性はなかったのだ。

その点、『白夜行』の雪穂に「猫」との例えは適切であった。会う者によっては彼女は「上品」な部類の猫に思われたが、本当に育ちの良い篠塚一成が彼女に抱く印象は同じ「猫」でも違っていた。大学生となった雪穂がソーシャルダンス部に入ることになり、他の男子部員はその美しいお嬢様らしさに舞い上がった。だが、一成は「彼女の猫のような目」について、「言葉ではいい表せないような微妙な棘」が含まれ「危険な光」、「卑しさを秘めた光」を感じたのだ。さらに「本物のお嬢様ならば、ああいう光を目に宿らせることはないはず」と彼は考えた。

後年、一成は探偵に拾った時期によってなつき方が異なる飼猫の習性について、子どもの頃の体験を話す——「ある程度大きくなってから拾った猫というのは……餌をくれるからとりあえず一緒に暮らしてはいるが、決して油断してはならない——そんなふうに分人にいきかせているようなふしがあります」。彼は雪穂を高級な猫どころか、野良猫に例えるのだ。

まさに一成の指摘は、的を得ていた。雪穂は自己実現を果たしつつも人生について次のように振り返る——「あたしの上には太陽なんかなかった。いつも夜。でも暗くはなかった。太陽に代わるものがあつたから。太陽ほど明るくはないけれど、あたしには十分だった。あたしはその光によって、夜を昼と思って生きてくることができたの」。ここで読者は『白夜行』の意味を知るわけだが、ミステリー・ファンなら、この夜にうごめく「猫」に、江戸川乱歩の名作のタイトル『陰獣』を連想するのではあるまいか。まさに雪穂こそ「陰獣」であり、お嬢様のような上品な猫ではなかったのだ。それどころか危険な獣であった。

大学に入った直後の雪穂がサークル活動を物色しているとき、「猫のように少しつり上がった目を」向けたのは、ソーシャルダンス部のポスターである。彼女は、猫が獲物を見つけたように、何か自分にとって重要な発見をするとき、猫のような目を見せるきらいがある。まさにソーシャルダンス部は、彼女にとってステップアップのチャンスととらえたのであろう。

また後年、探偵の今枝が、雪穂の店に素性を偽って訪ねたとき、彼女は目ざとく彼の腕にカ

ルティエの限定品である時計を見つける。以前に篠塚一成が同種の時計をはめていたのを、彼女は覚えていた。このときの雪穂については「アーモンド形の目」と書かれているが、後日、今枝が彼女の様子を語るときには、彼女の「猫を連想させる鋭い目」を思い出したり、「猫のような目」を脳裏に浮かべている。どうやら、東野において「アーモンド形の目」は「猫の目」を指すようである。

とすれば、この小説において、雪穂の目が「アーモンド形」と説明される箇所が他にもあることが納得できよう。高校生だった雪穂のために迎えられた数学の家庭教師、中道正晴は彼女に興味を持ち、その過去を探るが、その聞き込み先の略図と電話番号をメモした紙を、うっかり雪穂の前で落としてしまう。それを拾って見た瞬間、「アーモンド形の彼女の目が、さらに大きく開かれ」るのだ。「猫」が標的を見つけたようではないか。

何気ない様子でありながら、そこに陰謀が秘められているとき、やはり彼女は「猫」になる。高宮誠と結婚する前日、彼女は約束なしに彼の自宅を訪ねる。その理由は「旅行に持っていかなきゃいけないもので、いくつか買い忘れていたものがあるの。それで付き合ってもらおうと思って」というたわいないものだったが、本当の目的は他にあった。彼女の「アーモンド形の目が、宝石のようにきらきらと輝いて見えた」のは、そのためだ。

では『白夜行』第二部ともみなされる『幻夜』（2004）においてはどうか。このヒロイン、新海美冬の残忍な強さと妖しい美しさに、唐沢雪穂との共通点が見出せるのだが、彼女について「猫」という言葉が比喩に使われることはなかった。ただ、雅也の叔父殺しを見たとき、美冬は「やや吊り上がった目を見開き」、その殺人の証拠となるかもしれないビデオテープを騙し取るため撮影者を訪れた彼女の「やや吊り上がり気味の大きな目が妖艶な光を放っており」、物語終末近くで美容整形を済ませた彼女は「少し吊り上がった大きな目」で「夫の顔を見据え」るのだ。このように美冬の目は少し吊り上がって大きく、いわゆる猫系美女を連想させよう。

さらに失踪事件担当の刑事が聞き込みのため訪ねてきたとき、昼食に誘う「美冬のアーモンド形の目が妖しく光った」のである。「アーモンド形の目」は、東野においては猫のような目と同義語であった。つまり猫的という点においても雪穂と美冬のタイプは類似し、どちらも野良猫ということになる。

そのように捨てるに惜しい過去がないので、美冬は人生のやり直しを肯定する。美容院経営のパートナーに青江を誘うとき、彼女は「人間は何回ぐらい生まれ変わると思う？」と尋ねるし、美容整形によって彼女は変身し続けるつもりでいる。それもまた、彼女にとっては「生まれ変わり」なのだ。英語の諺に「猫には9つの命がある」というのがあるが、その意味でも、美冬は猫的といえよう。

さて、東野は『白夜行』以前に、すでに女性について上等の猫と雑種猫に分けて説明している。「あとがき」で彼が「これまでに書いてきた短編の中で最も思い入れの強い作品」と語る「動物家族」（1995）において、主人公の塾は、周りの人間たちがさまざまな動物に見える。高校生の姉は「猫」であり、某女性タレントを真似た髪型をしていることについて「そのタレントはペルシャ猫のように品もあり容姿も端麗」だが、いっぽう姉は「自分が安っぽい雑種猫であ

るという事実から目をそらし、何とかそのペルシャ猫のようにみせかけようとして」おり、「どう逆立ちしても近づけないどころか滑稽なだけということに気づいていなかった」とある。すでにこのとき、猫タイプの女性にも、2種類あることを東野は認めていたと考えられよう。この短編は、いわゆる本格ミステリーとは程遠いが、東野が「最も思い入れの強い作品」と特別視していることから、彼の人物描写における感性を伺うべきであろう。

もちろん猫のような女のタイプを描くのは、東野に限ったことではない。むしろ文学に登場する悪女や神秘的、あるいは不気味な女の表現としては平凡ですらある。『ダイニング・アイ』(2007)でも、魅力的すぎる女性の出現に、次のような記述がある——「妖艶な輝きを帯びた目が、見つめ返してきた。ネコ科の肉食動物を思わせる危険な光も同居している」。物語の後半では、この女性の様子は蛇にたとえられるが、猫と蛇は文学においては、共通点が多い。不気味さが強まれば、「猫」から「蛇」に比喻が変わるのだ。

ただし、東野は猫絡みのありきたりの言葉を使いたくなかったのかもしれないが、猫のような女性は『白夜行』、『幻夜』、『ダイニング・アイ』以外の作品にほとんど登場しない。だが猫が人になる話は書いた。『夢はトリノをかけめぐる』(2006)である。

《夢吉が主人公》

東野圭吾は『夢はトリノをかけめぐる』について「単なる観戦記ではつまらない。どうすればいいだろうと考え、ファンタジー小説にすることにした」と記している。ここには推理小説的要素はなにもない。だがなるほど、単なる観戦記ではトリノ・オリンピックの興奮がおさまった途端に誰も読まなくなるだろう。だが、トリノを知らずとも、あるいはスポーツに関心がなくとも、猫好きならばいつの時代にも、これを喜んで読むだろう。まさに「猫頼み」で一冊分が書かれたのだ。

冒頭文「僕はネコである」から分かるように、主人公は猫で、しかも「出だしは超有名な小説をパクっている」が、この猫には夢吉という名前がある。

というわけで、この観戦記は、夢吉の視点から描かれている。すると、どうなるか。東野のことを「おっさん」と呼び、東野の自虐的コメントが、猫の言葉として発せられるのだ。その結果、ますますコミカルな雰囲気盛り上げてくれるのである。

たとえば、「おっさんの職業は作家だ」に続く「いんちき臭い小説を書いて、生計を立てている」とのコメントは、決して東野自身の口から出ることはない。これが書かれたのは、前年に発表した『容疑者Xの献身』でついに直木賞を受賞し、意気揚々としていた頃だ。自宅には祝いの花が続々と届き、「猫がいるので置き場所に困り、ベッドの周りに並べたら、少女漫画のシーンみたいになった」という。そんな人生絶頂期の自虐発言は、嫌味にしか聞こえまい。ところが、あら不思議、猫の目を借りれば、「おっさん」は俗っぽくいい加減なほど、この作品の魅力が増すのだ。

ここでは夢吉が、ある朝起きると、人間の青年になっていた。このアイディアはカフカの『変身』をも連想させる。「年の頃は二十歳前というところか。鏡で見たかぎりでは、なかなかの

男前だ」と、自惚れが強いのも猫の発言と思えばコミカルである。

おっさんと夢吉とが漫才のようなやり取りを交わしながら、ウィンタースポーツの取材旅行やトリノ・オリンピック観戦をする。もちろん彼らは様々な人と会うのだが、夢吉がもともと猫であることは、すぐに受け入れてもらえる。国内旅行はともかく海外旅行の場合、パスポートはどうなるのか。おっさんが担当編集者の黒衣に相談する——「以前に話したと思うけど、こいつは本来ネコなんだ。それでパスポートとかはないんだけど、大丈夫かな」。すると「ネコにパスポートが必要だという話は聞いたことはありません。それに現実的にはありえない話で、小説だから大丈夫でしょう」

これを聞いていた夢吉が「なんといういい加減な連中だろう。きつといつもこういう調子で、『小説だから平気でしょう』なんてことをいっているに違いない」と思う。夢吉は、痛烈な東野文学批評家でもあるのだ。この単行本出版から3年後、文庫本化されたときに加えられた書き下ろし短編では、再び夢吉が主人公となって登場する。

その際、彼は以前の本について、「エッセイは苦手だからといって、僕を主人公にした小説仕立てにしたのだ。苦肉の策だったけど、こうして読み返してみると、やっぱりおっさんに観戦記なんかを書かせちゃいかんなあと思う。オリンピックの臨場感、緊張感がちっとも伝わってこない。単に感想をだらだらと書いているだけじゃないか。基本的におっさんはホラ話が得意で、事実を面白く伝えるのは上手くないのだ」と酷評する。

確かに、ときに東野のエッセイは、趣味に走りすぎて読者を置き去りにするきらいがあり、面白い作品とつまらないものとの差が大き過ぎる。ただ、読者の笑いを意識したようなエッセイは、例外なく愉快である。そしてまさに夢吉が人間と化して同行する『夢はトリノをかけめぐる』は、ファンタジーだから成功したのではなく、「ホラ話」系のコミカルなタッチで描かれ、しかも愛猫とおっさんとの珍道中だからこそ読者、とりわけ猫好き読者の心を掴んだのである。

また前述のように、直木賞受賞直後のトリノ旅行で、この頃の東野は意気揚々としていたはずだ。その自信に裏付けされ、夢吉のポーズを借りて、ふだんのエッセイの自虐的笑い以上に、自分を曝け出すこともした。たとえば東野自身、かつての結婚生活についてはまず語らないが、ここでは彼の語学コンプレックスについて、夢吉はこう説明している。

おっさんは昔、結婚していた。その頃は頻繁に海外旅行をしていた。奥さんが旅行好きだったからだ。奥さんは英語がぺらぺらだった。おっさんはまるでだめだ。そのコンプレックスが海外旅行アレルギーとなったことを僕は知っている。この旅行でアレルギーが改善されればいいなあ。

このように東野が自分の言葉としては語ることを潔しとしない事柄も、猫の口を借りて堂々と発言できる。それは冬季オリンピックの盛り上がり不足についての辛口コメントにまで発展する。夢吉は遠慮なく指摘する——「耐震偽装とホリエモン関連ばかりで、トリノなんてお愛想程度にしか報道されてないぞ」。これは東野の本音と考えられようが、人気作家としては

直接的には言いづらからう。しかし「猫」を口実にすれば、かなり手厳しい意見も許されそう
だ。さらに「僕の知り合いのネコたちに聞いてみても、盛り上がっているという話は全然聞か
ない」と猫の次元で語らせることで、冬季五輪低迷論の鬱陶しい雰囲気は多少とも和らぐ。そ
んな免罪符的効果が、コミカルな猫には認められるのだ。

けれどもここで夢吉を主人公にするという手段は使ってしまった。同じ手が使えるのは、文
庫本化に加えるための書き下ろし短編くらいで、これが最後のチャンスだった。いつまでも猫
頼みではいけないと、東野自身、この作品の執筆によって、気付いたのではあるまいか。

このように見て行くと、大の猫好きではなかったかもしれない東野が、現実に夢吉という猫
を飼うことによって、その文学に、彼独特の方法で「猫」を用いたと推測できるのだ。多くの
芸術家が、「エロティック」、「神秘的（あるいは不気味）」、「コミカル」、「实际的（役に立つ）」
のいずれかの猫を描いてきたことについては、前述の拙著などで議論してきた。だが、東野の
場合は、そのいずれのパターンにも属さない、まさに彼ならではの、ミステリー小説にのみ登
場しうる「猫」により、その作品の特異性と作家の才能を再認識させられるのである。

『トリノ』の翌年、『幻夜』が文庫化された折の『青春と読書』4月号のインタビュー記事で、
東野はペットについて「偉大な存在」と答え、そのページにはサインとともに寝そべて本を
読む可愛い猫のイラストが描かれている。また作家生活25周年特別企画として編集された『東
野圭吾公式ガイド』（2012）の最終ページでは、彼のプロフィールとサインとともに、2本足
で立つ可愛い猫が「おっさんはまだまだがんばるニャ」と言っているイラストが印象的である。
夢吉は東野の偉大な応援団長であり続けているようなのだ。

しかし当然のことながら夢吉にもいずれ死が訪れよう。本論執筆中（2015年夏）に、猫が登
場する東野の最新作「サファイアの奇跡」が『SF宝石』8月号に掲載された。野良だが夢吉
を連想させる薄茶色の縞柄雄猫が、少女によってイナリと名付けられ、可愛がられたが交通事
故死する。だが、その脳が、病気のベルシャ猫・サファイアに移植され、イナリは青い毛の高
級珍種としていわば生まれ変わるのだ。そして成長した少女は、この猫を引き取り、ブリーダー
垂涎の青い毛の子どもたちが次々に生まれる。飼い猫の寿命は20年といわれる。1994年生まれ
の夢吉は去勢されて子孫を残すことはできないが、東野のSF小説世界では、繁栄の象徴とし
て愛情を込めて描かれ生き続けているのだ。

Cats in the Works of Keigo Higashino

Tamaki Horie

Some writers are ardent cat-lovers. Among them, Yukio Mishima was called “crazy about cats” by his own father. Though not to the same extent as Mishima, Keigo Higashino is fond of cats. This tendency is clearly evident in his writing after he got Yumekichi, a light brown tomcat. Since that time, cats have begun to appear in his stories.

In *Either One Killed Her* (*Dochiraka ga Kanojo wo Koroshita*), a young lady loved cats and the pictures of cats brought her the chance to meet a man, who later caused her tragedy. The neighboring lady, who was also a cat-lover, heard voices on the night of the murder and also remembered the pictures of cats which disappeared from the victim’s room. Though indirectly, these cats led to the clue which solved the case.

In *I Killed Him* (*Watashi ga Kare wo Koroshita*), a man kept Sally, a gorgeous Russian Blue, which brought him the chance to meet a beautiful lady. When she committed suicide because of the broken heart, he decided to have his revenge on her ex-lover. After the ex-lover’s death, he became one of the suspects. Another suspect was found to have killed a dirty stray cat in order to carry out an experiment on the effect of poison. When the detective visited the former suspect and saw Sally, he said enigmatically, “This cat seems happy.”

In some of Higashino’s short stories cats become important plot devices: criminals arrange for others to feed the cats so that they will have alibi and be able to accomplish the plans of murder. In other short stories, cats provide the clue to the murder with their hair or some ornament of collar.

In *White Night Journey* (*Byakuya-ko*), an archetypal femme fatale heroine, Yukiho reminds one of an elegant well-bred cat, but Kazunari, who comes from a wealthy family, feels that she is a wicked stray cat. Yukiho’s almond-eyes are described as these of a cat, especially when she happens upon an object of desire. Also in *Mysterious Night* (*Genya*), the femme fatale heroine, Mifuyu has almond-eyes. Of course the cat type femme fatale may be criticized as being cliché, but Higashino’s originality in terms of cat people can be found in *Dream Runs around Torino* (*Yume wa Torino wo Kakemeguru*).

The story is not a mystery but a fantasy fiction with its setting being the Torino Winter Olympic Games. At the beginning of the story, Yumekichi, Higashino’s own cat, is turned into a young man and together they go to Torino to watch the games. Instead of the usual report on winter sports, Higashino employs Yumekichi as the first person narrator, who often criticizes his master severely and humorously in a similar vein to the unnamed cat of Soseki Natsume’s famous novel while telling the story of their tour around Torino.

A year after Torino, Higashino declared that he would not write essays again. He thinks of himself

as a mystery writer and not a talented essayist. For the final book of selected essays, *Perhaps My Last Bow* (*Tabun Saigo no Goaisatsu*) he drew some comical illustrations of cats and used the photo of Yumekichi's hair for the book cover. This work fully shows his affection for Yumekichi.

Thus, we can see how Higashino uses Yumekichi to develop unique ideas for his works as well as appreciating him as a beloved pet.